

LUXMAN

CL36u MB88u LX38u

The name of LUXMAN for audio excellence is no accident. Our single-minded pursuit of perfection has been exclusively devoted to the audio field and no other. Nor did our preeminent position come

ラックス

about overnight. The Lux R & D program has repeatedly brought the audiophile ever closer to every music lover's dream: Ultimate Sound Reproduction Realism.

Ultimate Series



LUX CORPORATION

Ultimate Series

発売のご案内

このたび、真空管によるオーディオアンプを3機種、Ultimate Seriesとして発売することになりましたので、ご案内申し上げます。

形式・品番・価格は右記の通りですが、その品番からも大体の内容および性格は、ご推測いただけるものと存じます。

いずれも、弊社の伝説的な系譜を継承する、その意味ではお馴染みのアンプともいえますが、このシリーズに関しましては、ラックスの創業以来、技術・デザイン両面にわたって直接製作に携ってまいりました上原 晋（現技術顧問）が再度腕をふるい、思い残すところなきまでに、徹底した手直しを加えました。もっともパワーアンプのMB88uなどは、全くの新作とってよく、名出力管KT-88によるパワーアンプの極め付きとして、新たに話題を呼ぶものと確信いたしております。コントロールアンプのCL36uについても同じことが言えます。回路構成から使用パーツ、プリント基板のパターンに至るまで、抜本的な改良を押し進めていますから、これもまた、生まれ変わったニューモデルと見ることができます。

プリメインアンプのLX38uは、10数年来（初代のSQ38は昭和38年の発売）のロングラン商品ですが、再三再四にわたって折々の改良を加えてまいりましたので、ここでは音質面でのアプローチが主体になっています。なお、このLX38については、既に多数の方にご愛用いただいておりますので、この機会にお手持ちアンプの実費による改造（回路面に限り）も検討しています。

本シリーズ改良の動機は、音質のさらなる見直しですが、オーディオ機器としてのトータル的な完成度にも目を向けて、造形的な美しさに磨きをかけるべく、外装にもきめ細かな手直しをほどこしています。

量産時代のオーディオ商品としては、異例の企画に属しますが、限定販売を条件に、あえて実現に踏み切ったような次第です。したがって、台数に限りのあることは、ご承知いただかなければなりません。実質価値と同時に稀少価値の高いアンプとして、オーディオ趣味の再認識に、いくらかでもお役に立ち得れば幸いです。

作者の立場から

アルティメイト (Ultimate) とは、どういう意味ですか。

— 最後のとか、究極のとか、そんな意味合いで使っているわけです。根本の、というようなニュアンスもあるようです。

この3機種を選んだ理由は。

— アンプの代表的な形式から一機種づつ、という気持ですが、LX38とCL36については、今まで何度も手を加えてきましたので、最後まで面倒をみたい、というような心情も働いたわけです。

SQ38Fのときも末尾のFはファイナルだなんて聞きましたか。

— たしかにそういうつもりでした。あのときはというよりも、いつも手を加えるときは、そのつもりで全力を上げるのですが、あとになると、また気になりだして……。

どんなところが気になりますか。

— 大雑把に言えばバランスです。気になるということは、そういうことだと思います。音のバランスもあるし、外観上の視覚的なバランスもある、といった具合で、これはレベルに応じてつきまとう問題でしょう。音と体裁の間にもあります。

こんど気になったのは、どんな箇所ですか。

— 部分的にどこというよりも、こんど場合はもう少し何とかなるはずだというような願望から手をつけたわけです。レベルを上げたいというか、そんな気持です。

そのポイントを具体的に。

— 透明感とでもいうのでしょうか。なんとなく濁っている。音が汚れているとでもいうのでしょうか。薄膜をはがすように膜1枚取除くと、ビックリするくらい音が透き通って、イキイキしてくる。これは特性を眺めただけではわからない。聴きながら、いろいろやっ

てみる以外にないわけです。それに球だからといって、昔ながらの球らしい音を求めたのではないのです。録音現場の雰囲気まで感じるような生々しさが欲しいのです。現在のトランジスタアンプが、力づくで強烈に再生しようとするため、盲点になっているリアルな雰囲気描写を、力まずして達成しようとしたのです。

真空管に限定したのは。

— 限定したわけではなく、たまたま手を加えるのに都合のよいアンプが真空管だったということです。それに真空管は、これ自体が究極の姿に完成していますから、対策すれば敏感に反応するというのもあって、音を追いかけるには、トランジスタよりも向いています。

トランジスタよりも真空管の方がよいと考えているわけですか。

— よいという意味は、いろいろあるんじゃないですか。それは目的によって決まることでしょう。トランジスタも見方によっては、よい素材です。球もそうです。オーディオアンプの場合は、音、音楽、といった複雑で微妙なものを扱いますから、素材としては素性の、ハッキリしたものの方が何かと都合がよいわけですね。正体の掴めない素材では、目的を達成するまでに時間がかかります。今すぐいい音が聴きたいというときには、球の方が有利です。可能性を追求するということになればトランジスタの方が面白いかもしれません。

こんどのアンプには相当自信をお持ちのようですが……。

— あるといえばあるし、ないといえない。なんといっても最後は感覚の領域になりますから、自分が絶対だと感じる点では自信もありますが、他人がどう感じるかについては、自信が持てない。だからこそ、商品として世に問うてみたいという気にもなるわけです。

- コントロールアンプ CL36u Ultimate
- パワーアンプ MB88u Ultimate
- プリメインアンプ LX38u Ultimate

予価 ¥360,000<限定200台>

予価 ¥250,000<限定400台>

予価 ¥300,000<限定200台>

